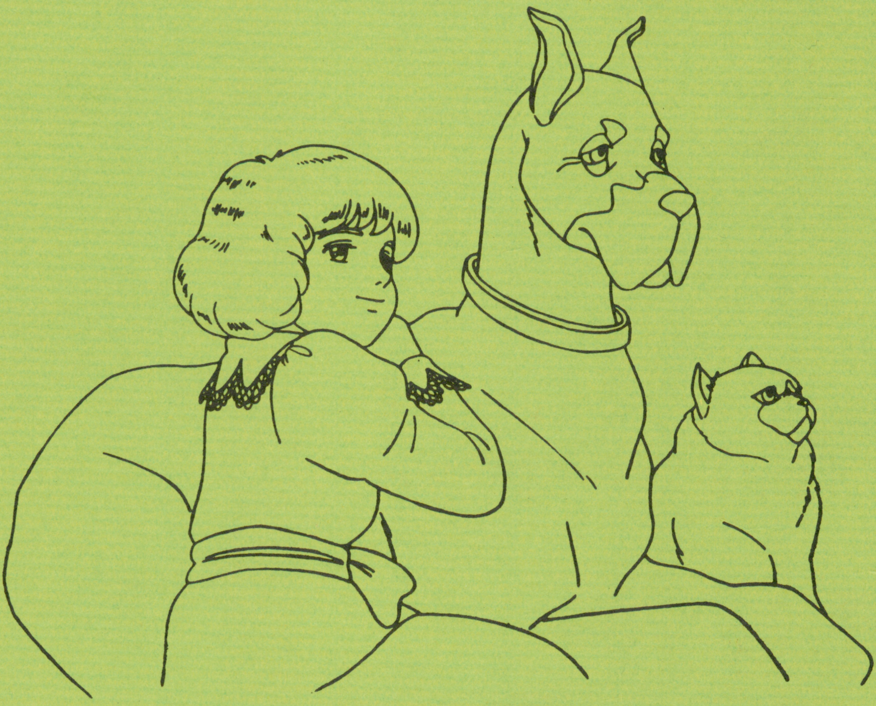
世界名作劇場

しょう こう し
小公子セディ

第 10 話

『いやだ!! イギリスなんか行きたくない！』



提供 ハウス食品

制作 フジテレビ
日本アニメーション

脚本　石森史郎

登場人物（第10話「セディを連れて行かないで!!」）

セディ

アニー

ハビシャム

ホッブス

ディック

サラ

キャサリン

マイケル

エリック

ボブ
ロイ
ミッキー
アグネス
ポーラ
ロレッタ
ニーナ
ローラ
エセル
黒人の少年達

1

街頭

靴台を前に手や頬っぺたに靴墨をくっつけたセディが坐っている。

その前に紳士の脚が立つ。

セディ「いらっしゃいませ！」

ニコヤカに見上げたセディ。やあ、と顔が輝く。

ぬうッと立っているのはハビシャム。

セディ「ハビシャムさん！」

ハビシャム、怒りもあらわに睨みつけるようにして見下している。

セディ「ハビシャムさん！　いつ、イギリスから来たんですかァ?!

……何をしに来たんですかァ?!」

ニコニコ懐かしそうに見上げるセディ。

怒りに口ひげをふるわすハビシャム。

その二人を怪訝に見比べているディック。

セディ「ハビシャムさん……どうして黙ってるんですかァ?!」

ハビシャム、何か言おうとするが口許がひきつる。ジロジロとセディの姿を見て、むうッとなり、ステッキでドンと地面を叩くと何も言わずくるっと背を向けて去って行く。

セディ「……ハビシャムさん?!」

ディック、その後姿を見ながら、

ディック「物凄くおっかない顔してセディを睨みつけていたな……何者だい?」

セディ「ハビシャムさん、なんであんなにこわい顔したんだろ?」

2 セディの家・LDK(夕)

ええッ?!……台所に立っていたアニーが驚ろいた顔を

向ける。
頬に靴墨をくっつけ、手を汚したセディがアニーを見
上げている。

アニー「ハビシャムさんが?!……本当に、ハビシャムさんが、今、
此のニューヨークに来てらっしゃるの?!」

驚きが戸惑いに変っているアニー。

セディ「そうなの……ぼくもびっくりしちゃったァ」

アニー「そう……ハビシャムさんが……」

沈んだ表情で呟くように言う。

セディ「ね、母さん、ハビシャムさん、何しに来たんだろ?」

アニー「え!……(判っているのだ)」

セディ「ハビシャムさんったら、変なんだ。ぼくが、何しに来たん
ですかって聞いたら、ぼくをものすごい顔で睨みつけるの!」

アニー「……セディを見て睨みつけた……!」

セディ「ぼく、ディイックに靴の磨き方を教わっていたんだよ」

アニー「靴の磨き方を?!」
セディ「靴を磨くのが、あんなに難かしいとは思わなかったな！…
…靴磨きをして稼ごうかなァって考えたんだけど」
アニー「靴磨きをして稼ごうって、セディ、本気であなたは！」
セディ「（ニコニコと）うん……だけど、ぼくには無理みたい……
ブラシもちゃんと持ってないし……だから、ディックも、
諦めなって言ってた」
アニー「セディ……あなたは、そんな事を考えていたの……」
セディ「だって、母さんがひとりで働いているんだもの。ぼくに出
来る事、何かしたいんだよね」
アニー「セディはそんな事考えなくていいから、野球でも何でも、
好きな事をしてていいって、母さん、言ってるでしょ！」
セディ「それはわかってるけどさ」
アニー「ハビシャムさんは、セディが靴磨きをしてて、手も顔も靴
墨をくっつけていたりしたから、睨みつけたんでしょうね！」

セディ「う、うん……そうかも知れないけど、ハビシャムさんったら、なんにも言わないで、ぷいと背中を向けて行ってしまったのさ……へんな、ハビシャムさん！」

アニー「セディ、顔と手、石鹸で、きれいになるまで、早く、洗ってらっしゃい！」

セディ「はーい」

洗面所へ走って行く。

アニー、とうとう来たか……と、重く沈んだ表情で立尽している。

3 アニーの部屋（夜）

ジェイムズの写真。

それを手に硬い表情で瞶めているアニー。

アニー「ジェイムズ……私が一番恐れていた事が現実になりそうよ！

……ハビシャムさんがどんな目的で、此のニューヨークに、再びやって来たのか……私が想像していた通りよ……でも、貴方が私とセディを、守って下さったように、私はセディを守ります！……きっと守りますからね！」

4

アパートの表（翌朝）

アパートからセディがキャサリンと出て来る。

エリックとミッキー、ロイ、ボブが待っている。

セディ「や。みんな！……お早う！」

エリック「セディ、お早う！」

ロ　イ「よ！　相変らずキャサリンと一緒か」

ボ　ブ「キャサリンはセディの事が好きだから片時だって離したくないんだよね」

キャサリン「なまいき言うんじゃないよ！」

ミッキー「なーんだ、嫌いなのか。ほんじゃ、ま、セディ。おれ達と行こうぜ！」

セディの腕をとるミッキー。

行こ、行こ……と、セディを取囲んで四人が駈けだす。

キャサリン「待ってよォ！……セディを私から奪っちゃいやーッ！」

叫んで追いかけていく。

5 セディの家・LDK

窓辺に立ち、それを見おろしているアニー。硬く複雑な表情である。

アニー「セディ……セディは、いつも、母さんと一緒よ！」

6 学校・教室

セディとエリックと三人組。

エリック「いいか、セディ。今度こそ、マンハッタンの子には負けられないんだからな」

セディ「わかってる！」

ロ　イ「いつも向うのピッチャーにやられてるけど、セディの腕が上ってるしな」

ボ　ブ「頑張ってくれよな、セディ」

アグネス「やーねえ。明けても暮れても野球の話ばっかり?!」

ニーナ「たまには私みたいに勉強の話でしたら?……ねえ、ポーラ」

ポーラ「ニーナったら、勉強が大きらいなくせによく言う！……ねえ、ロレッタ?」

ロレッタ「セディ、私がしっかりと応援に行くから頑張って！」

エセル「私も行くわよ。セディ……でも、無理しないでよね。負けても私はかまわないのよ」

ローラ「ちょっとォ。余計な事言わないでよ、エセル……やる以上

は勝たなきゃ！　勝つのよ、セディ」

女の子が男の子を押しのけてセディを取り囲んでセディの腕を摑んだり、手を握ったり。セディ、困っている。

ボブ「面白くないな。セディばっかり！」

セディ「エリック、助けて……助けてよ！」

エリック「君達、勝って欲しいんだろ？　だったら、しっかり練習をやらなきゃ！　練習の打合せをしてるんだから邪魔しないでよ！」

ミッキー「そー、そー。そういう事！」

エリック「セディ、それに、君達……学校が終ったら、すぐにいつもの空地に集合の事」

セディと三人組、おーう、元気よく握り拳を突き上げる。

7

ホッブスの店・表

グローブを握ったセディと店の前に品物を並べている
ホッブス。

ホッブス「学校から帰って来るとすぐ練習とは嬉しいねえ。その意
気込みなら、今度こそコテンパンにやっつけてやれそう
だな、セディ」

セディ「そのつもりさ、ホッブスさん」

グローブの中にボールを投げ乍ら言う。

ホッブス「ニューヨーク・ジャイアンツも此の処連戦連勝だしな。
セディ達もきっと勝つな！　ウーン、間違いなく勝つ
な！」

セディ「ホッブスさんの期待にこたえるためにもしっかり練習やら
なきゃ！」

パーッと走り去る。

ホップス「頼もしいぞ、セディ！」

ニッコリとセディの後姿に声をかける。

近付いて来る馬の蹄の音に、む?!　と振り向くホップス。

馬車が近付いて来て停る。

ハビシャムが降り立つ。

8

空　地

セディが走って来る。

エリックが立っている。

セディ「エリック！　もう来てたの?!　みんなはまだみたいだね…

…じゃ、二人で、キャッチボールやってようか！」

エリック「セディ、ごめん。ぼく、練習、出来ないんだ」

セディ「え?!　どうして？　どうしてさ！」

エリック「ごめん。申し訳ない……どうしても父さんの仕事、手伝わなきゃならなくなって！」
セディ「エリックの父さんの仕事？」
エリック「父さん、レンガ工やってるだろ？……急ぎの仕事になったんだけど、レンガを運ぶ手が足りないんで手伝ってくれって言われて」

そこへ三人組が走って来る。

ボブ「エリックは、じゃ、練習出来ないのか」
ロイ「なんだよ。しっかり練習やろうって言いだしたのは、エリック、おまえだぞ！」
エリック「申し訳ない！でもさ、今日は……」
セディ「ねえ、みんな……ぼくたち、エリックを助けてやろうよ！」
エリック「セディ！」
セディ「急ぎの仕事なんだろ？レンガをどんどん運ばなくちゃいけないんだろ？」

ミッキー「面白そうだな。ロイ、ボブ、手伝おうや！」

ロ　イ「ミッキーも手伝うっていうんじゃ……」

ボ　ブ「ロイと二人きりで練習しても仕様がないもんな」

セディ「じゃ、やってくれるんだね！」

9　レンガの工事現場

マイケル「有難う、有難うよ。セディ、ミッキー、ロイ、ボブ」

レンガ造りの家の壁を数人のレンガ工が、忙がしく手を動かし作業をしている。

マイケルの前にセディ達。

一輪トロッコでレンガ運ぶ黒人少年達。

マイケル「手が無くて猫の手も借りたい有様なんだよ。君達に手伝って貰えると、小父さん達は本当に助かるんだ……ひとつ、お願いするよ……ただし、無理をしないで。運べる

だけでいいから、気をつけて運ぶんだ」
はーい！　ニッコリ返事をするセディ達。

10 セディの家・LDK

椅子に掛けているハビシャム。
前に紅茶のカップを置くアニー。
アニー「やっぱり、おいでになりましたのね、ハビシャムさん」
ハビシャム「そう……アニーさんは、私が参るのを待っておられましたか。そうですか」
アニー「いいえ、ハビシャムさん（向い合って坐って）決して待っていた訳ではございません。むしろ、来て頂きたくない、ずーっとそう願っておりました」
ハビシャム「来て欲しくない……左様、私は招かれざる客……アニーさん、貴女のお立場からしますと、そうかも知れま

せんが、あのセドリック様は、ドリンコート伯爵の血を継いでおられる、この世でたった一人の、伯爵家の世継ぎでございます。こうして、お迎えにあがるのは当然でございましょう」

アニー「でも、セディ……セドリックは私の息子でございます。私がおなかを痛めて生んだ私の子供でございます！」

ハビシャム「ですが、ジェイムズ様のお子様でございますよ……由緒正しき、幾世紀にもわたって伯爵を継いでおられるジェイムズ様の血を受け継がれたお子様……つまり、伯爵家を継がれてフォントルロイ伯爵となられるおかたでございますよ！」

アニー「フォントルロイ伯爵……！」

ハビシャム「左様……イギリスに移られて、フォントルロイ伯爵と呼ばれるおかたになられるのでございます！」

11

工事現場

そのセディは、レンガを積んだ一輪トロッコを器用に握りしめて押している。
前を行くボブは右に左に大きく蛇行して進んでいる。

ボ　ブ「おっとっとっと！……難かしいなあ、このトロッコは！おっとっと！」

セディ「ボブ、トロッコに遊んでもらってるみたいに見えるよ！……しっかり！」

ボブを追い抜いて運んでいく。
壁のレンガを積んでいるマイケル。

マイケル「大助かりで、みんなも喜んでるよ、セディ！」

セディ、ニッコリ見上げて、トロッコからレンガをおろす。

マイケル「気をつけろよ、セディ……それに、みんなも……レンガ

をおろす時、足の上に落さないようにしろよ!」
エリック「心配しない!! 大丈夫だよ、父さん……ぼくたちは野球
やってるから運動神経抜群だもんね!」
セディ「あッ!」
ロ イ「そういう事!」
トロッコからおろそうとしたレンガが手から滑り足許
に落ちる。
ぴょんと飛んでよけているセディ。
セディ「セーフ! ハハハ」
マイケル「セーフか……セーフはいいが、怪我でもしたら、君達の
父さん母さんに申し訳ない事になるんだから……ほんと
に、気をつけてくれよ!」
セディ「大丈夫!……小父さんこそ、足を滑らせて、落っこちない
ようにね!」
マイケル「セディの奴……!」

苦が笑いをして手を動かしている。
セディ、レンガ運びのトロッコを押す黒人の少年達と、やあ、明るい笑顔を交し、並んでトロッコを押していく。
セディの底抜けに明るい笑い顔の玉の汗がキラキラ輝いている。

12 セディの家・LDK

ハビシャム、カップをゆっくり口に運ぶ。
硬い表情で眼を注いでいるアニー。
ハビシャム、紅茶を飲み、カップを置く。
ハビシャム「アニーさん、貴女が何を仰言っても無駄です。私はセドリック様をイギリスに連れて参りますよ！」

〈C・M〉

13

セディの家・LDK

アニー、抗議の眼をハビシャムに向ける。

アニー「セディは……セドリックは私が育てます。どうか、イギリスにお戻りになって、伯爵に私の意志を……いいえ、亡くなった私の主人、ジェイムズの意志でもございます……その事をお伝えになって下さいませ！」

ハビシャム「アニーさん、母親として、貴女の仰言られる事は私にも理解出来ない訳ではありません」

アニー「でしたら、どうぞ私の気持を伯爵に」

ハビシャム「アニーさん、伯爵は、御自分の眼の黒いうちに、セドリック様をお手許に置いて、伯爵としての教育をつけさせたい。そう望んでおられるのです」

アニー「そちらの都合で、そのような身勝手な事を仰言られましても……私は従う訳には……」

ハビシャム「伯爵になられるかたに、アニーさん、貴女は靴磨きをさせておられるのですよ！」
アニー「あれは……！」
ハビシャム「小さな美しい手を汚されて靴ブラシを握っておられるセドリック様を見た時、私はわれと我が眼を疑いました……そして、怒りが全身から湧いてきて……私はもう一言の言葉を言う事も出来ませんでした！」
アニー「……（唇を結んでいる）」
ハビシャム「イギリスへ行けば、広大な領地を持つ領主になられ、伯爵として、元老院で国の政治にも関わる役目も果さなければならない、そういう位置につかれるかたなのでございますよ……セドリック様の約束された将来を、アニーさん、貴女は貴女の狭い了見で奪ってしまわれるのですか！」
アニー「……」

ハビシャム「セドリック様の母親だと仰言るのなら、そこのところをよくお考えになって頂きたいですね……ま、今日のところはこれで失礼致しますが（立上り）セドリック様の将来を、よーくお考え下さい！」

アニー「（見上げて口を結んでいる）……」

14

工事現場

レンガを積んだ一輪トロッコを黒人少年のトロッコと競走して押しているセディ。

二人共、キラキラ顔に汗を光らせている。

並んで進む二人……同時に到着する。

セディと黒人少年、顔を見合わせてニッコリ笑い合う。

二人はトロッコからレンガをおろして積み上げる。

路をやって来た馬車が停る。

ハビシャム「セドリック様！」

その馬車の中からハビシャムが見ている。

セディ、レンガを積んでいる。

ハビシャム、キッと眼を光らせてステッキを握る手がぶるぶるふるえている。

15

セディの家・LDK（夕）

椅子に坐ってテーブルの上に両手を置いたアニー、ガックリ首を折っている。

室内は薄暗い。

テーブルの上で組んだ手を握るアニー。

歪んでいるアニーの顔。

ハビシャムの声「セドリック様の約束された将来を、アニーさん、貴女は貴女の狭い了見で奪ってしまわれるのです

か！」

アニーの顔。二度、三度、首を振る。

ハビシャムの声「セドリック様の母親だと仰言るのなら、そこのところをよくお考えになって頂きたいですね！」

アニー、掌を顔に当てて、暫くそのままの恰好で苦悩している。

窓の外……暗くなって、向い側のアパートの窓に灯りが点る。

アニー、顔から掌を離す。

アニー「セディ！……もう、こんなに暗くなっているのに、まだ帰って来ないなんて！」

アニー、ハッとなって椅子から立上る。

アニー「ハビシャムさんが、セディを！……まさか……まさか、そんな事は……それにしても、遅いわ……こんな時間まで一体！」

落着きなく歩き回り乍ら呟いていたが、ドアを開け、
廊下へ出て行くアニー。

16

アパートの表（黄昏）

ガス灯が点っている。
アニーが心配そうに立っている。
周囲のアパートの窓は灯がついている。
不安を隠せないアニー。
向うの角からセディが現われる。

アニー「（ホッとなり）セディ！」

セディ、走ってアニーに近寄る。ハアハア息を弾ませてすぐには言葉が出ない。

アニー「（表情がきびしくなる）何時だと思ってるの、セディ！」

きびしい母の顔をハッと見上げるセディ。

アニー「野球に夢中になっていたのね！……野球はしてもいいって
　　　言ったけど、何時だと思ってるの！　宿題だってあるんで
　　　しょ！」
　　怒っている母を申し訳なく見るセディ。
セディ「母さん……ごめんなさい。ぼくが悪かった！……ごめんな
　　　さい！」
　　頭を一度さげてアニーを見上げる。
　　アニー、たまらなくなってしゃがむとセディの両肩に
　　手を置いて、
アニー「野球に夢中になってもいいけど、こんなに暗くならないう
　　　ちに帰るようにしなきゃ」
セディ「わかりました、母さん……」
　　片方の手にグローブをぶらさげている。
　　もう片方の手……掌、指のマメがつぶれていた……セ
　　ディ、アニーに判らないように握りしめて背中の方に

隠している。

17

アパート群（夜）

青い月が中天に浮んでいる。
フルートが聞える。

18

セディの家・LDK（夜）

セディがフルートを吹いている。
椅子に掛けて聞いているアニー。
セディ、指が痛い。眉をしかめて指を動かし吹く。ミスして音が外れる。

アニー「セディ！　また間違えた……さっきから何度も……どうしたっていうの！」

セディ「すみません、母さん！　最初からやり直します！」
母に判らないように掌を開き見るセディ。
指のマメが破れ、血が赤く滲んでいる。
アニー「セディ、やる気がないの！　ないんだったら、もう練習なんかしなくてもいいから、おやめなさい！」
セディ「すみません！　聞いてください、母さん！」
眉をしかめ痛さに耐えながら指を動かしフルートを吹くセディ。

19

アパートの外（夜）

向うに馬車が停っている。
中からハビシャムがアパートを見上げ、聞え来るフルートに、耳を傾けている。

20 セディの家・LDK（夜）

窓のカーテンを閉めるために窓辺に立ったアニー、その馬車に気付き、硬い表情になって見おろしている。
フルートを吹き続けるセディ。

21 馬車の中から見ているハビシャム

22 窓辺から見おろしているアニー

23 何も知らずフルートを吹き続けるセディ

24 アパートの外（朝）

樹々は緑……小鳥が囀り蟬が鳴き始める。

25

セディの家・ドアの外の廊下（朝）

箒で掃除をしていたアニーが、ええッ、顔を上げる。

首にタオルを垂らし作業服姿のマイケルが立っている。

アニー「セディが?!……本当なの。マイケル、その話！」

マイケル「なんだい、セディは何も話さなかったのかい？」

アニー「何も……マイケルの仕事を手伝ったなんて事は一言も！」

マイケル「セディらしいねえ……随分助かったんだよ。エリックひとりじゃ、とてもじゃないがああはいかなかったが……セディが音頭をとってくれたもんだから、ロイやボブやミッキーまでが、遅くまで協力してくれてねえ……本当に助かったよ」

アニー「そうだったの……それでゆうべは……」

マイケル「早く帰れって言ったんだけどね、レンガを全部運ぶって言ってくれて……帰りがあんなに遅くなっちまったんだ

よ……そんな訳で、お礼とお詫びを言いにさ」

アニー「セディは何も言わないんだもの……」

マイケル「そういうとこがセディのいいとこだよなあ……うちのエリックもセディのそういうとこを似て貰いたいよなあ……エリックにセディのような友達がいてくれるんで俺も安心だよ。これから先もずーっと仲良くしてて貰いたいもんだよねえ」

アニー「え、ええ……私の方こそ……」

マイケル「そいじゃ、セディに、本当に有難うって、そう伝えといてや……今日も暑くなりそうだ！」

去って行く。

アニー「（呟く）ごめんよ、セディ。知らないもんだから、母さん。きびしく叱ってしまって……！」

生地を抱えたサラがやって来る。

サ　ラ「アニー、お願い！　頼まれてくれない?!」

アニー「お早う、サラ……私に何か？」

サ　ラ「（満面崩れそうな笑み）うちのキャサリンがさ、あの子は
　　　ほら、私に似て声がいいだろ？」

アニー「え？……ええ……声がねえ……」

サ　ラ「教会の合唱隊に選ばれたのよ！」

アニー「キャサリンが?!　それはおめでとう」

サ　ラ「それでさ、合唱隊の制服を大至急作って貰いたいの！」

　　　生地をアニーの手に渡す。

アニー「合唱隊の制服？……判ったわ。で、いつまで？」

サ　ラ「今度の日曜日……男の子の聖歌隊と一緒に歌うのよ！」

アニー「日曜日に？」

サ　ラ「うちのキャサリンが、合唱隊の一員になって歌うのよ！…
　　　…その制服は、やっぱり、アニー、貴女に作って貰わなき
　　　ゃね！」

アニー「判ったわ……学校から帰って来たらすぐにキャサリンをう

ちへ寄越して頂戴。サイズをとって、すぐに仕立てにかかるから！」

サ　ラ「よかった……でも、アニー、無理しないでよね！　セディが心配するからさ」

アニー「ええ。大丈夫よ。私もセディの心配して沈んだ顔、見たくないもの！」

笑顔を見交すアニーとサラ。

26

空　地

照りつける太陽の下……セディがエリック相手に投球練習をやっている。

エリック「ストライク！……セディ、今のボール、もう一球！」

ボールを投げ返す。

セディ、野球帽のツバをうしろにやって大きく投球モ

ーション。

27 セディの家・アニーの部屋

窓を開け風を入れてミシンを踏んでいるアニー。
ドアのチャイムが鳴る。
アニー、ミシンを止めて部屋を出ていく。

28 玄関—廊下

アニー、ロックを外してドアを開ける。
廊下にハビシャムが立っている。
アニー「(ハッとなる)ハビシャムさん!」
ハビシャム「今日は、アニーさん……今日は私、アニーさんが反対してもセドリック様をお連れするつもりで参りました」

アニー「えッ……！」
ハビシャム「セドリック様は、おいでになりますか？　おいでになりましたら、私にお渡し下さい」
アニー「そんな！……セディを連れていくなんて！」
ハビシャム「セドリック様は?!……どうなんです？　此処にはいらっしゃらないんですか?!」
アニー「ハビシャムさん！　セディは……私が、私の傍に置いて育てます……貴方に渡すなんて事は出来ません！」
ハビシャム「セドリック様はいらっしゃらないんですか？……それじゃ、また、レンガ運びをやっているんですか！」
アニー「そ、そんな事は……！」
ハビシャム「それとも、靴磨きですか！……おいたわしや……伯爵になるべきおかたがレンガ運びだの、靴磨きだの……もう、そのような事は、セドリック様にはさせられません！……今すぐにイギリスにお連れします！」

アニー「ハビシャムさん！　邪魔をしないで下さいッ！」
ハビシャム「何ですと?!」
アニー「折角……折角、セディと私が、ささやかでも暮しているのに……私達を……邪魔しないで下さい！」
　すると、セディの声が飛んで来た。
セディの声「ハビシャムさん！　帰ってください！」
　その声に、ええッとなったハビシャムとアニー、廊下に出る。
　廊下に野球の練習から帰って来たセディがハビシャムを睨みつけて立っている。
セディ「ハビシャムさん……母さんのお仕事を邪魔しないで下さい！　さ、帰ってください！」
　口ひげをふるわして見返すハビシャム。
　驚いて見返しているアニー。
　帰れと指さしてハビシャムを睨みつけて見上げている

セディ。

つづく